

『クライム・ソドム1』 サンプル

目次

登場人物紹介

第一話

(サンプル掲載はここまでとなります)

(以下、製品版収録)

第二話

第三話

最終話

登場人物

半藤太一郎 (ばんどう たいちろう)

DK三年。元剣道部主将。

大学の入学費を納めるために来店した銀行で事件に巻き込まれる。

平常時 6.8センチ、勃起時 17.9センチのチンポ。

坂島金三 (さかしま かねぞう)

年齢不詳。銀行強盗。

太一郎に目をつけ、徹底的に辱める。

徳成 (とくなり)

年齢不詳。坂島金三の部下。

安田 (やすだ)

太一郎の家の近所に住む知り合いの男子大学生。

鴨井 (かもい)

徳成に銃を突きつけられている男子学生。

島貫 (しまぬき)、時任 (ときとう)、

人質になった会社員たち。

【お願い】

この小説は金目によるフィクションであり、現実に存在する個人・団体などとは無関係です。

無断転載・私的利用の範囲を超えた共有など、著作権法に触れる行為は控えていただきますようお願いいたします。

この作品は犯罪行為を推奨するものではありません。フィクションとして、お楽しみください。

作中の性行為描写はすべてファンタジーとなります。現実のセックスへの参考になさらないようお願いいたします。

第一話

「お、太一郎じゃないか」

「こんにちは、安田さん」

銀行のロビーで知り合いの男子大学生である安田（やすだ）に声をかけられ、半藤太一郎は深々と一礼した。

「聞いたぞ、お前さん、ひったくり犯を捕まえるのに協力して表彰されるんだってな。凄いな」

「そんな大層なことはしていませんよ」

安田の称賛の言葉に太一郎は首を振った。

部活動の帰りに道の向かいから警官に追いかけているピンク色の皮の手提げかばんを振り回しながら走る男を見かけた太一郎は、持っていた竹刀で打ち据え、逮捕に協力したのは事実だが、太一郎は大したことをしていないと思っている。

「いやいや、武の道を歩むとはいえ咄嗟にそれだけの判断ができるってことは立派だよ。

流石剣道部主将経験者にして全国大会優勝者、男の中の男だな」

安田が太一郎の謙遜を否定し、更なる称賛の言葉を重ねてくる。

「止めてくださいよ」

気恥ずかしくなった太一郎は顔の側で手を振った。

「そういえば、今日はどうして銀行に来たんだ？」

「入学費用の振り込みのためです」

「なるほどな、志望校合格おめでとう」

「ありがとうございます」

安田の祝福の言葉に太一郎は再び頭を下げた。

安田と別れて受付番号発券機から受付番号を受け取った太一郎は空いている席に座って

電光掲示板を見た。

太一郎の番号は144。

現在の対応番号が139なのであと五人ほどだ。

ポケットに手を入れて、スマートフォンを家に忘れたことに気がついた太一郎は暇つぶしの雑誌を探して、周囲を見回した。

スーツ姿のサラリーマンと思われる男性や、割烹着を着た女性、学ランを着た学生やサングラスを装着した男性など、多くの人が座っていた。

そのサングラスの男性が立ち上がり、隣に座っていた男子学生に黒い鉄の塊を突き付けた。

「騒ぐな！

騒ぐとこのガキを撃ち殺すぞ！」

サングラスの男の言葉に、太一郎は男が持っている道具が銃だと分かった。

銀行強盗。

その言葉が太一郎の脳裏に浮かんだ。

それは銀行に居合わせた他の客たちや従業員たちも同様だった。

「きゃー」

悲鳴が上がった。

太一郎はドラマのような出来事に何をすればよいのか分からない。

「動くな！」

炸裂音が銀行のロビーに響いた。

男子学生を人質に取ったサングラスの男の側にもう一人、サングラスをかけた男が銃を上方に構えて立っていた。

「いいか、この少年の命はお前たちの行動にかかっている。

動くな」

サングラスの男が周囲を見回して威圧する。

太一郎は恐ろしさで足が震えた。

ひたたくり犯と相対したときは竹刀を所持していたこととひたたくり犯が素手だったこともあり、勇気を出せた。

けれど、銃を持った二人組の銀行強盗相手に勇気を出すことは、剣道部主将を経験したことがあるとはいえ、剣道青年でしかない太一郎には無理な相談であった。

「おい、そこの剣道部の太一郎」

サングラスの男が太一郎を指さした。

「お、俺ですか……」

太一郎は己の顔を指さした。

周囲の客たちも太一郎を見ている。

「そうだ。

タウン誌で見たぞ、全国大会優勝者にしてお手柄剣道部の太一郎」

サングラスの男が口元を樂しげに歪めた。

「俺たちをどうこうされたら困るのでね。

服を脱いで、無防備だってことを証明してくれるかな」

サングラスの男の言葉を太一郎は理解できなかった。

「聞こえなかったかな、裸になって無防備だっことを俺たちに証明してくれるかな」

もう一度言われ、太一郎は銀行強盗たちの言葉を理解した。

だが、理解したからといって実行できるかと言われたら話は別だ。

太一郎は周囲を見回した。

居合わせた客や銀行員の中には女性がいる。

太一郎は体育会の常として、同性の間での着替えには抵抗がない。

けれど、女性という異性の目がそこに加われれば話は別だ。

女性の前で裸になるなんて、考えたこともなければできるとも思えない。

裸になるということはチンポを見られるということであり、いくら緊急事態とはいえ異性にチンポを見られるなんて、やはり無理だ。

太一郎が逡巡していると、男子学生を押さえている方のサングラスの男がドン！と床を踏み鳴らした。

「坂島の兄貴の言うことが聞けないのか、チンカス！

てめえが裸にならねえっつーなら、このガキに風穴開けるぞ！」

「止さないか、徳成」

坂島と呼ばれたサングラスの男が男子学生を拘束している徳成を宥めた。

「健全な剣道青年に女性の前で裸になれと言われて、ほいほいと服を脱ぐはずがないだろう？

露出魔でもない限りはな。

だが、考えてもみたまえ」

坂島が太一郎をじっと見つめる。

「私は無用な流血を望まないが、見ての通り、徳成は気性が荒い。

君が言うことを聞かなければ男子学生の……うん、男子学生では通りが悪いな。

君、名前は」

坂島が男子学生に問いかけた。

「鴨井です……」

震える声で男子学生が答えた。

「ありがとう、鴨井くん。

話を戻そう。

太一郎くんが言うことを聞かなければ、鴨井くんは殺されてしまうだろうね。

まあ、太一郎くんにとって鴨井くんは他人だ。

放っておいても構わないだろう」

「ひい」

坂島の酷薄な発言に鴨井が短く悲鳴を上げた。

「だが、この事件が解決した後で、太一郎くんは鴨井くんのご家族にどう説明をするのかな。

ご家族は、保身のために鴨井くんを見捨てた太一郎くんを許すかな。

いや、許さないだけならまだいい。

復讐をしようと思われたら、大変だ」

坂島がにやりと笑った。

「私はこういうことをしている手前、事件には詳しくてね。

復讐に燃える者たちがどれほど残虐になれるかも知っている。

家族を狙われたり、あるいは、結婚して幸せになって子どもも生まれた頃に思い出したように子どもを狙われたりとかね。

なにしろ、復讐には理屈がない。

理屈がないからこそ、時効もない。

一度恨まれたのなら、一生背負わなければならないのだよ」

坂島の言葉は毒のように太一郎の心へと侵入していった。

坂島は、鴨井を見捨ててもいいと言いながら、その一方で復讐の恐ろしさを説く。

脱げ、と恫喝されるよりも道筋を立てて脱がないことの不利益を説かれる方が太一郎には恐ろしかった。

「さて、太一郎くん。

君は露出魔かな。それとも、健全な剣道青年かな」

坂島が太一郎に決断を迫った。

ここまでされた以上、太一郎には選択肢などなかった。

チンポを見られたくないという気持ちを押し殺して、服を脱ぎ始める。

同年代の剣道青年よりもむっちりとした上半身が露わになる。

太一郎の上半身は胸毛や腕の毛などの体毛が薄く、清潔感があった。

そのまま太一郎はベルトに手をかけ、引き抜くとズボンのボタンを外し、チャックを下ろした。

チャックの隙間からもっこりとした赤のボクサーパンツが覗いている。

太一郎が顔の熱さを自覚しながらズボンを下ろしていく。

心臓の鼓動が羞恥心で乱れているが、太一郎は必死にズボンを下ろし、足から引き抜いた。

太一郎の足も上半身と同じように体毛が薄かった。

太一郎は赤のボクサーパンツのゴムに手をかけた。

羞恥心がボクサーパンツを限りなく重くするが、太一郎は必死に歯を食いしばりながらボクサーパンツを下ろしていく。

ゴワゴワとしたチン毛が下腹部に姿を見せた。

上半身や足の清潔感のある体毛の薄い肉体とは対照的、いや、他の部位の体毛が薄い分、反動で濃くなったのではないかと邪推できるチン毛の濃さだ。

みっしりと生え、密林を成しているチン毛の先に常人のチンポよりも太い根元が見えてきた。

太一郎は必死な顔をしてボクサーパンツを下ろしていく。

剣道青年とは思えない太々しい陰茎が露わになり、ずっしりとした金玉が毛におおわれている様子が明らかになる。

そして、土筆の穂のようにぷっくりとした皮を被った亀頭が露わになった。

露わになった太一郎のチンポは、皮を被っていることぐらいしか因縁のつけようのない立派なチンポであった。

太一郎がチンポをブラブラさせながらボクサーパンツを膝下に下ろしていく。

そして、足からボクサーパンツを引き抜き、全裸になった太一郎はチンポをブラブラさせ

ていることに耐えかねて両手でチンポを隠した。

「ふむふむ」

坂島が太一郎にねっとりとした視線を向けてくる。

「太一郎くん、申し訳ないがチンポの皮も剥いてくれるかな。

皮の隙間に竹刀でも隠されていたら困るしね」

「ああ、そりゃ確かに困りますね」

坂島の言葉に徳成が追従する。

「わ、分かりました」

太一郎は周囲にいる女性たちのことを考えないようにしながら、手で包皮を雁首まで引き下げた。

太一郎のピンク色の健康そうな亀頭とうっすらとチンカスで白く濁っている雁首が露わになった。

「おいおい、チンカス野郎は本当にチンカスだったのかよ」

徳成が太一郎の雁首についてチンカスを見咎め、嘲笑う。

太一郎は周囲の視線に耐えかねて目を閉じた。

誰も彼もが太一郎の雁首に溜まったチンカスを見咎め、不潔にしていると軽蔑している気がして仕方がなかったのだ。

「徳成、そう決めつけるものではないよ」

坂島が嘲笑うかのような口調で口先だけの庇い立てをする。

「太一郎くんも、風呂に入ってもチンポを洗わない不潔男子だとは思われたくないだろう？」

私の質問に正直に答えてくれるかな。

……まあ、答えなくないならば答えなくても構わないのだがね」

先ほど、復讐の理不尽さと恐ろしさの話をしておきながら、答えなくとも構わない、すなわち、鴨井を見捨てても構わないと言い放つ坂島の酷薄さに太一郎は恐ろしくなった。

「では、最初の質問だ。

太一郎くんのチンポは何センチなのかな」

坂島の質問に太一郎は言葉に詰まった。

太一郎はチンポが人並みより大きいという自覚はあるが、自分のチンポを計測したこともなければ、されたこともないのだ。

「分かりません、測ったこともありません」

太一郎が首を振って返答すると、坂島が懐から巻き尺を取り出し、太一郎に向かって投げてよこした。

「使いなさい」

坂島の言葉は優しくだったが、太一郎にとっては暴君の命令に等しかった。

太一郎は側に落ちている巻き尺を手に取り、己のチンポの根元に当てた。

そして、ゆっくりと巻き尺を引いていった。

6.8センチメートル。

それが太一郎自身も知らなかった、己のチンポの平常時の長さであった。

「では皆に聞こえるように大きな声で発表してくれるかな」

坂島が太一郎を辱める命令を重ねてくる。

「6.8センチメートルです！」

鴨井を人質に取られていることもあり、太一郎は坂島の命令に従うしかなかった。

腹に力を籠め、羞恥を押し殺して大きな声で叫んだ。

「何が、6.8センチメートルなのかな」

だが、坂島は太一郎を辱める手管を緩めようとしなない。

「俺の……」

チンポは、と言いかけて太一郎は言葉に詰まった。

この場には女性もいることを思い出してしまったのだ。

女性の前でチンポと叫ぶのは太一郎の羞恥心が耐えきれなかったのだ。

「どうしたのかな、太一郎くん。」

何が6.8センチメートルなのかな」

太一郎の赤らんだ顔は羞恥に震える裸体を見れば、何を逡巡しているのか想像がつきそうなものだというのに、坂島は太一郎を辱めようと言葉を重ねてくる。

「俺のペニスは6.8センチメートルです！」

太一郎は保健の授業を思い出し、ペニスと叫んだ。

ペニスならば教科書にも載っている単語なので、チンポに比べたら恥ずかしくないと思っただの。

「ペニスか。」

私は古い人間だから気取った言い方をされても分からないのだけどね。

一体、何が6.8センチメートルなのかな」

だが坂島はペニスという返答で許す気はないようであった。

何がどうしてもチンポと言わせたいようだ。

「気取った言い方してんじゃねえぞ、チンカス！」

太一郎の逡巡を見透かしたかのように徳成が叫ぶ。

太一郎は追い詰められていることへのおぞましさから身体を震わせた。

女性の前で、「チンポ」などと叫びたくはない。

だが、叫ばなければ徳成が鴨井を射殺するかもしれない。

それを踏まえれば、太一郎には選択肢などなかった。

「俺のチンポは6.8センチメートルです！」

羞恥心を押し殺し、恥ずかしさのあまり溢れそうになる涙を堪えながら太一郎は叫んだ。

ここまで恥ずかしいことをしたのだから許されるだろうとも思った。

「俺というのは誰のことかな」

だが、坂島は太一郎をますます追い詰めていく。

太一郎を辱める手管を緩めようとしなない。

「半藤太一郎のチンポは6.8センチメートルです！」

太一郎はがむしゃらに叫んだ。

恥ずかしいとか女性からの視線とか、そういうことを思い出したら羞恥に耐えられなくなると感じたのだ。

「おいおい、分かってないね、太一郎くん」

坂島が大袈裟に首を振った。

「太一郎くんは露出魔なんだろう？

だったら、そのこともきちんと言わないと駄目じゃないか」

全裸になることを強要しておいての坂島のこの言い草に太一郎は怒りを覚えた。

彼らが銃を所持していなければ殴りかかりたかったほどだ。

けれど、現実問題として坂島たちは銃で武装をしており、太一郎に勝ち目はない。

人質に取られている鴨井のことを考えれば、彼らを刺激するわけにはいかないのだ。

「露出魔の半藤太一郎のチンポは6.8センチメートルです！」

羞恥に震え溢れそうになる涙を堪えながら太一郎は叫んだ。

「よく聞こえないな、もっと大きな声で叫んでくれるかな」

坂島が愉し気に笑った。

弄ばれていると太一郎は強く感じた。

けれど、逆らうわけにはいかないのだ。

「露出魔の半藤太一郎のチンポは6.8センチメートルです！」

太一郎は腹の底から叫んだ。

「もっと大きな声で」

「露出魔の半藤太一郎のチンポは6.8センチメートルです！」

「もっとはっきりと」

「露出魔の半藤太一郎のチンポは6.8センチメートルです！」

「剣道部なんだろ、もっと叫べるだろう？」

「露出魔の半藤太一郎のチンポは6.8センチメートルです！」

叫びすぎて喉が痛くなった太一郎は膝に手を当てて、ぜいぜいと呼吸を繰り返した。

「はははははは、馬鹿みたいだな、太一郎くん」

坂島がわざとらしく拍手をした。

「では、太一郎くんにお使いをしてもらおうかな」

坂島が名刺を太一郎に投げてよこした。

名刺の裏には数字の羅列が書かれている。

「その名刺を銀行の職員さんに見せて、この口座に5億円を入金するように伝えてくれるかな」

「分かりました」

太一郎は片手で名刺を持ち、もう片方の手でチンポを隠そうとした。

「駄目だよ、太一郎くん」

坂島が太一郎を制止した。

「太一郎くんは露出魔なんだろう？

露出魔がチンポを隠したらおかしいじゃないか」

その露出魔という言葉も坂島の強要だ。

太一郎は怒りを抑え込むのに必死になった。

だが、坂島たちには銃と人質がいる。

太一郎が短気を起こしたら取り返しのつかないことになる。

だから、太一郎は歯を食いしばり、羞恥心を押し殺した。

女性にチンポを見せるものではないという常識を頭から追い出そうとする。

そうして、太一郎は名刺を銀行の窓口にいた女性職員に手渡した。

女性職員の視線が己のチンポに合わせられている気がして太一郎は名刺を手渡すと早足で元の位置に戻った。

「では、太一郎くんへのインタビューを続けようかな。

ああ、分かっているとは思いますが、嘘はつかないようにね。

まあ、鴨井くんなんかどうでもいいのなら、好きにすればいいさ」

坂島がにやにやと笑っている。

鴨井の泣きそうな顔を前にして、よくもまあこんな言葉を言えるものだ、と太一郎は坂島の邪悪さに腹が立った。

「太一郎くんは、体毛が薄いわりにチン毛と玉の毛がぼーぼー一だけど、こだわりがあるのかな」

「いえ、ありません」

「それじゃあ、剃ったりしたこともないのかな」

「……はい」

太一郎は嘘をついた。

太一郎のチン毛が生え始めたのは小学校五年生の時であった。

同級生たちはつるつるの下腹部をしているというのに、太一郎はひよろひよろと毛が生えだしたのだ。

保険の授業で個人差があると教えられはしたものの、周囲では自分だけがチン毛が生えていることに耐えきれず、太一郎は中学生になるまで風呂上がりに己の下腹部の毛を剃っていたのだ。

坂島は嘘をつくな、と言ったが、こんな恥ずかしい過去を告白できるほど太一郎は神経が太くなかった。

それに、嘘を見抜かれるとも思わなかったのだ。

「嘘をついたら駄目だよ、太一郎くん」

坂島が銃を銀行の女性行員に向けた。

女性行員は悲鳴を上げることもできずに震えている。

太一郎はどのようにして嘘がバレたのか分からず、恐ろしさに震えることしかできない。

「まあ、恥ずかしいということは分かるから、一回だけは許そう。

次に嘘をついたら」

坂島がにやりと笑って言い放った。

「太一郎くんのせいで人が死ぬよ」

坂島の言葉に太一郎は何度も頷くことしかできない。

嘘をついて誤魔化したら人が死ぬなどと言われて、動揺しないDKなどいるはずがない。

そして、剣道部主将経験者とはいえ、太一郎はそういう意味では普通の剣道青年であった。

「それじゃあ、太一郎くん、本当のことを話してくれるかな」

坂島に促され、太一郎は過去の恥ずかしい思い出を話すしかないと覚悟を決めた。

「チン毛が生え始めたのは小学校五年生の時です」

太一郎がそう告白をすると坂島が口笛を鳴らした。

馬鹿にされていると感じたが、太一郎は言葉を紡ぐしかなかった。

「周囲の男子はまだチン毛が生えていない中、自分だけ生えているのが恥ずかしくて、それで、中学校に入るまでの間、風呂上がりにチン毛を剃っていました」

「太々しいチンポの割にナイーヴなんだね、太一郎くんは」

坂島がにやにやと笑っている。

「じゃあ、次の質問に行ってみよう。

太一郎くんの精通は何歳かな」

坂島が恥ずかしい質問を重ねてくる。

どういう理由かは分からないが、坂島は太一郎の嘘を見抜ける。

誤魔化すことは誰かの死を意味する。

だから、太一郎は正直に恥ずかしい思い出を語ることしか選択できなかった。

「精通をしたのは中学校に入る前で、ジュニアリーダーの先輩にエロ動画を見せられて、それでムラムラして精通しました」

「精通はパンツの中？

それともしこったのかな？」

「……パンツの中です」

太一郎は坂島の無神経な質問に心をすり減らしながら回答する。

「で、そのエロ動画、どんなシーンだったのかな」

坂島の質問が太一郎の秘密に食い込んでくる。

太一郎は答えたくなかった。

気心が知れた友達同士ならともかく、赤の他人や知り合いの男子大学生である安田、そして女性たちに自分の性癖を語りたいたいなどと思えるほど図太い神経をしていなかったからだ。

けれど、太一郎の嘘は誰かの死を意味する。

坂島やその部下である徳成の様子を見ていればそれがよく分かる。

だから、太一郎は秘密を暴露するしかなかった。

「フェラのシーンでした」

「太一郎くんはそのシーンでオナニーをしたのかな」

坂島が太一郎の自尊心を踏みにじる質問を投げてくる。

「はい。しました」

太一郎は恥を忍んで回答をする。

「太一郎くん、フェラチオされたいかな」

坂島が答えにくい質問を重ねてくる。

太一郎も男だ。

セックスをしたいし、フェラチオだってされてみたい。

けれど、思春期である太一郎にとって、赤の他人や女性が聞いている中でセックスの願望を語ることは困難なことであった。

人質たちの命がかかっている状況でなければ、こんな質問に答える義理はない。

けれど、太一郎がたられればの妄想をしたところで現実は変わらない。

太一郎が嘘をついたり、答えることを拒んだりすれば誰かが殺されてしまうのだ。

「フェラチオされたいです」

「はっきりとした声で」

「この右手が竹刀よりもチンポ大好きシコリンハンドです！」

「そんな声じゃ心に響かないぞ」

「この右手が竹刀よりもチンポ大好きシコリンハンドです！」

何度も何度も右手でオナニーをしていることを告白させられ、太一郎は顔が熱くなった。

この場には知り合いの男子大学生である安田もいるのだ。

これから顔を見るたびに、ああこいつ今日もオナニーをしたのか、などと思われたらと思うと恥ずかしくて仕方がない。

坂島たちは悪魔だ、と太一郎は思った。

銃を所持しているという圧倒的優位を利用して、弱者である太一郎を罵り、辱め、愉しんでいる悪魔だ。

だが、悪魔相手に普通の剣道青年である太一郎は敵わない。

従うしかないのだ……

「じゃあ、次の質問に行ってみようか」

坂島がにやにやと笑っている。

「フェラチオ大好き太一郎くんは、ここにいる人たちのなかでフェラチオしてほしい人はいるのかな。

ぐると顔を見てから答えるんだよ」

それはつまり、太一郎を見つめている人たちの顔を見ろ、ということか。

坂島の悪辣な要求に、太一郎は身震いをした。

けれど、坂島に逆らうことは太一郎にはできない。

誰かを犠牲にして、恨まれてまで保身に走ることはできないのだ。

だから、太一郎はぐると周囲を見回した。

徳成は獰猛な笑みを浮かべている。

その徳成に押さえ込まれている鴨井は今にも泣きそうな顔をしている。

会社員たちは太一郎に同情的な眼差しを向けている。

主婦は太一郎から目を逸らした。

安田は太一郎と目が合うと小さく頷いた。

銀行の行員たちは怯えた様子を見せけている。

ぐると見まわした太一郎は口を開いた。

「俺は、好きな人にフェラチオをして欲しいので、この中にはいません」

太一郎が正直に答えると坂島が大袈裟に頷いた。

「なるほどなるほど。

剣道青年らしい純朴さだ。

いや、純朴な剣道青年はチンカスチンポをフェラチオしてほしいなんてあけすけなことを口にするはずがないか」

坂島がわざとらしく拍手をした。

その仕草の一つ一つが太一郎を馬鹿にしているとしか思えなかった。

「話を戻そう。

太一郎くんは好きな人がいるのかな」

しない。

「おいおい、太一郎くん。

勿体ぶって勃起チンポを見せない気なのかな」

坂島が太一郎に圧力をかける。

勃起させなければと焦れば焦るほど、太一郎の背中に汗が流れる。

太一郎はチンポを勃起させようと必死に扱くが、掌に汗が溜まるだけでチンポは勃起するそぶりを見せない。

このままだと不味い。

太一郎はどうにかしないと大変なことになると思った。

これまでの人生で最も切実に己のチンポを勃起させようとする。

そして思いついた。

太一郎は昨日のオナニーで使用した金髪美女のフェラチオ動画を思い出した。

ピンク色のリップがセクシーな女優だった。

彼女が黒人のビッグマグナムに奉仕する姿を思い出すと自然と腰の奥がムラムラする。

太一郎の手の中でチンポが徐々に硬く大きくなってきた。

太一郎の掌から勃起し始めた陰茎が伸びてくる。

「おいおい、本当に勃起させてるよ、この露出魔太一郎くん」

「チンカスチンポを見られたいんだな、淫乱」

坂島と徳成に嘲笑されて、太一郎は屈辱に身を震わせた。

太一郎だって、赤の他人や女性にチンポを見られたくない。

ましてや勃起チンポだなんて論外だ。

それを強要しているのが坂島と徳成だというのに、どうして太一郎が自ら望んで勃起チンポを晒そうとしているかのような言い方をされないといけないのか。

太一郎は怒りと屈辱で感情が乱れ、涙が流れそうになった。

けれど、太一郎は意志の力で涙を抑え込んだ。

泣いてしまっただけは坂島たちに負けたことになると思ったのだ。

そうこうしているうちに、太一郎の手の動きが大きくなっていく。

太一郎のチンポがどんどん勃起しているのだ。

「フル勃起です」

太一郎は己のチンポから手を放し、坂島にそう告げた。

太一郎の股間で震える勃起チンポは巨根と呼んでも間違いではないサイズであった。

真っ直ぐに伸びて凜とした陰茎は竹刀を連想させる。

亀頭は土筆の穂のようにぷっくりと膨れており、真っ赤に充血した亀頭は太一郎が童貞であることを如実に示している。

「おお、勃起すると皮がずる剥けなんだな、太一郎くん。

それじゃあ、その自慢のチンポの大きさを教えてくれるよな」

太一郎は坂島の要求に従い、床に落ちていた巻き尺で再びチンポの長さを測る。

根元に巻き尺の先端を押し当て、巻き尺を伸ばしていく。

5……10……15……16……

「17.9センチメートルです」

太一郎が恥を忍んでチンポの長さを発表すると、坂島が大袈裟に首を振った。

「おいおい、太一郎くん。

さっきの元気はどうしたの？

チンポを勃起させるだけで疲れちゃったの？

そんなことでセックスできると思うの？

ほら、元気を出してもう一度」

坂島の言葉に、太一郎は萎えチンを発表した時のようにしろと要求されているのだと分かった。

「露出魔の半藤太一郎の勃起チンポは 17.9 センチメートルです！」

太一郎が叫ぶと坂島が愉しそうに拍手をした。

「いいねえ、もう一度やってみよう」

「露出魔の半藤太一郎の勃起チンポは 17.9 センチメートルです！」

「聞き逃した人のためにももう一度叫んでみようか」

「露出魔の半藤太一郎の勃起チンポは 17.9 センチメートルです！」

「もっと叫びたくなっただろう？」

「露出魔の半藤太一郎の勃起チンポは 17.9 センチメートルです！」

勃起チンポの長さを叫ぶたび、太一郎の心は羞恥と屈辱に軋んでいく。

けれど、太一郎は逆らえない。

自分一人だったのならば、屈辱に耐えかねて自棄になったかもしれない。

けれど、坂島と徳成は太一郎の態度次第で他の誰かを殺傷すると暗に示している。

ならば、逆らうわけにはいかないのだ。

「それじゃあ、皆に自慢のチンポが見えるようにその場でぐるぐる回ろうか。

ああ、腰に手を当てて、腰を前後に振るんだよ。

チンカスチンポ万歳と叫びながら、勃起チンポがブルブル震えるようにね」

坂島が太一郎に屈辱的な動作を要求する。

「分かりました」

太一郎は頷くと、腰に手を当てた。

そして、腰を前後に大きく振る。

太一郎の勃起チンポがその勢いで前後にぶらぶらと揺れる。

「チンカスチンポ万歳！」

太一郎は大きな声で叫んだ。

そして、角度をずらし、銀行の窓口の方を向く。

真っ赤な顔をしている女性の行員と目が合い、太一郎は己が勃起チンポを露出しているのだということを思い知らされる。

けれど、従うしかないのだ。

太一郎は行員たちにチンポを見せつけるかのように前後に腰を振った。

「チンカスチンポ万歳！」

太一郎は女性行員が口に手を当てたのを見てしまった。

その手の下で囁かれたのは太一郎への軽蔑だろうと感じたのだ。

太一郎は泣きたくなった。

けれど、この辱めに泣いてしまっただけでは坂島たちに負けたことになる。
だから、太一郎は歯を食いしばって角度を変え、主婦たちに勃起チンポを向けた。
大きく前後に腰を振って、勃起チンポをブラブラさせる。

「チンカスチンポ万歳！」

主婦が顔をしかめ、サラリーマンらが同情的な眼差しを向けた。

太一郎はさらに角度を変えた。

安田と目が合った。

安田は食い入るような目で太一郎を見ている。

その視線が太一郎には針のように突き刺さった。

太一郎は心押し殺し、腰を大きく前後に揺らして勃起チンポをブラブラさせる。

「チンカスチンポ万歳！」

そう叫ぶたびに、太一郎の心の傷が大きくなり、ジクジクと痛みを伴っていく。

「まだまだ続けるよ」

けれど、坂島は太一郎を辱め、苦しめることを止めようとしめない。

太一郎はさらに角度を変えて、腰を前後に大きく振り、勃起チンポをブラブラさせる。

「チンカスチンポ万歳！」

太一郎の魂の慟哭が銀行の中に響いた。

「はい、じゃあ太一郎くん。」

腰を大きく前に突き出して、俺のチンポを舐めろのポーズ」

坂島が太一郎に屈辱的なポーズを要求した。

太一郎はそれに従い、腰を大きく前に突き出した状態でポーズを取った。

すると、坂島が懐からスマートフォンを取り出した。

「うんうん、いいねえ」

坂島がスマートフォンを構えたのを見て、太一郎はまさか、と思った。

「や、止めてください！」

坂島の行動から予想される屈辱に、太一郎は否定の声を上げてしまった。

「やだよ」

だが、坂島は太一郎の制止など気にする様子もなく、スマートフォンのシャッターを鳴らした。

「動くなよ。」

動いたら、鴨井くんのご両親が悲しむことになるからな」

坂島が太一郎の抵抗を抑え込む言葉を口にする。

太一郎は羞恥心で全身が熱くなった。

坂島が角度を変えながら太一郎のオールヌードを撮影していく。

「どうするつもりですか……」

太一郎が震える声で問いかけると坂島がにやりと笑った。

「有名人の全裸には使い道があるんだよね、色々。」

全国大会優勝者ともなれば、知名度は高いし、全裸写真だけで数十万は稼げるな。

あとはまあ、色々使い道がある。

……もしかして、嫌なのかな？」

坂島の悪意に満ちた質問に太一郎は小さく頷いた。
「じゃあ、太一郎くんを選ばせてあげよう。
太一郎くんは、自分の代わりに誰が辱められるべきだと思う？」
坂島の質問に太一郎は言葉に詰まった。
「俺は今、気分がいいから、五分以内に指名できたのなら、そいつを太一郎くんの代わりにするよ。
ほら、早く答えてごらん？」
そんなことを言われても、太一郎には答えることなどできない。
自分の代わりに誰かを酷い目に合わせたいなどと、言い切れるだけの胆力と自己愛など太一郎には備わっていないのだから。
太一郎は沈黙を続けるしかなかった。
「はい、五分経過。
これからも太一郎くんが暇つぶしをさせてもらおうからな」
坂島が愉しそうに笑った。

奥付

『クライム・ソドム1』より、第一話

初出：2021年5月29日

著者：金目

金目の同人活動一覧

【pixiv】

<https://www.pixiv.net/member.php?id=22137005>

【DLsite がるまに】

https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=/maker_id/RG01002299.html

【ゲイ小説進捗状況呟きアカウント】

https://twitter.com/chigaya_deep